

アスペクト形式「ている」の成立について

野田高広

maypole@gmail.com

キーワード: アスペクト形式 テイル 文法化 融合 再分析 関係節化 古典日本語

要旨

本稿は、野田 (2010) に対する批判である福嶋 (2011) への回答、および疑問点の提示を中心とする。『今昔物語集』のアスペクト形式「ている」「てあり」について議論した野田 (2010) での「Vテイル」という表記に対する批判について回答した上で、文法化、関係節化などの問題の考察を通して「ている」のアスペクト形式としての成立について議論する。「てあたり」から「ている」への変化が融合・再分析による段階的なプロセスとして捉えられること、および、具体的意味の抽象化を経つつも、両形式の間には現在の状態を表す構文としての同一性が認められることを示す。議論を通して、中世以前から見られる「てあたり」を現代日本語の「ている」に連続するアスペクト形式として記述することの妥当性を主張する。

1. はじめに

「ている」「てある」が現代日本語のアスペクト形式の中心的な存在として現在も盛んに研究が進められていることは言を俟たないが、これは古典日本語においても同様であり、とりわけ金田一 (1976) 以来、現代日本語のアスペクト研究と関わりを持ちながら様々な観点から論じられてきている。例えば、室町期以降の江戸語と上方語の「ている」「てある」を調査分析し、主語の有生性による両形式の使い分けに東西差が認められるという重要な点を指摘した坪井 (1976) は「ている」「てある」の体系的な通時研究の先蹤として位置づけられ、また、上代から現代までの「ている」「てある」「ておる」を対象に、それらのアスペクト的な意味以外にも「おり」の卑語性や格表示など多方面にわたる示唆的な議論を展開する柳田 (1991) がそれに継ぐものとして挙げられる。「てある」と関わりがある「たり」を含めると、言語形式の対立を重視して中古語のテンス・アスペクトの諸形式を総合的に扱い、古代語では進行相の意味を動詞の基本形が表していたことを指摘した鈴木 (1992) や、存在文、形容詞文、動詞文という述語類型の中で「存在様態」を中心にアスペクトの意味を組織する野村 (1994; 2003) が挙げられ、さらに、金水 (2006) に結実する存在動詞を中心とする金水氏の一連の論考は「ている」「てある」の研究にとっても看過できない重要な成果である。それに加えて、野村 (1994) の「存在様態」を援用して議論を展開し、室町後期の口語的資料の「ている」「てある」は、本動詞「いる・ある」の影響が強く、文法化の度合いが低いという点を指摘する福嶋氏の諸論考 (2000; 2002; 2004; 2005) が挙げられる。

このような背景のもとで、野田 (2010) では『今昔物語集』を対象にアスペクト形式「V テイル」と「V テアル」との差異性に着目して意味論的な考察を試みた。先行研究での両形式の記述では主語の有生性や事態の限界性が中心に据えられることが多いが、これらの道具立てでは説明が困難な「てある」の有生物主語の例は少なからず存在する。

- (1) 峰ニ箆居テ、偏ニ後世ヲ思テ、念仏ヲ唱ヘテ有ケルニ... (『今昔物語集』三一・二三; 岩波日本古典文学大系 5 巻 288 頁)

(1)のような有生物主語にも関わらず「てある」が用いられる例は、従来の枠組みでは説明することができないと思われるが、拙論では主格名詞の意図性や事態の個別性という意味素性を組み合わせることによって説明が可能となることを主張した (2 節で詳述)。

野田 (2010) は「ている」「てある」の選択要因を明らかにすることに主眼があり、両者がアスペクト形式か否かという点については何も述べておらず、アスペクト形式としての「ている」の成立時期についても一切議論していない。しかし、福嶋 (2011) はその不問に付したことに對して批判を試みており、「V テイル」の表記の下で取り扱う形式の大半は「たり」を伴う「てみたり」であるという点を指摘した上で、近代語のアスペクト形式としての「ている」の成立は 15 世紀を待たなければならないと主張する。これは、前述の福嶋氏の諸論考では室町時代前後の「ている」「てある」がアスペクト形式として未発達であったことを論じているのに、『今昔物語集』の時代 (1120 年以降成立) にアスペクト形式の「ている」が存在するのは時期的に噛み合わないからである。「てみたり」と「ている」とを同等に扱ってよいかという問題は 3 節で述べるとして、何を基準にアスペクト形式と認めるかというのは言語学的に重要な問題であることは言うまでもなく、また、アスペクト形式の通時相を研究対象とする筆者の立場としては、研究の立ち位置を定める意味でもその基準に對しての態度を明確に示しておく必要があるだろう。そこで本稿では中世日本語における「てみたり」から「ている」への変化に焦点を絞り、アスペクト形式としての「ている」の成立について形態・意味の両面から議論する。その結論として、形態変化を経てはいるが、「てみたり」「ている」の両形式は共にアスペクト形式であることを否定する必要はなく、両形式の連続性を認めた上で記述するべきであることを主張する。

本節に続く 2 節では野田 (2010) の大枠を示し、3 節では福嶋 (2011) の批判の中核を占める拙論での「V テイル」という提示の問題に對して回答する。4 節では、フランス語の単純未来形等を例に「あたり」から「いる」への意味・形態的变化を単一的な構造への融合と再分析を経る連続的なプロセスとして記述することが可能であることを示す。5 節では、意味の抽象化と関係節化の問題を通して「ている」の意味について議論し、『今昔物語集』での「てみたり」も現代語の「ている」同様にアスペクト形式と認められる根拠を提示する。6 節は結論である。

2. 野田 (2010) : 『今昔物語集』のアスペクト形式 V テイル・テアルについて

福嶋 (2011) では拙稿の中心的な論点に對してはほとんどふれられていないのだが、本稿の

議論の前提となる野田（2010）の概要を示す。野田（2010）は、従来注目されることが少なかった古典日本語の「ている」と「てある」とのアスペクト的な意味の差異に着目し、その分類に際して意図性と時空間的な個別性を統合的に扱う点が特徴である。『今昔物語集¹』に出現する動詞に後接する「ている」「てある」を比較検討した結果、個別的な場面で（＝〔＋時空間的個別性〕）、ある動作・状態が主格に立つものによって意図的に保持される場合（＝〔＋主格維持性〕）に「ている」が選択される傾向が強い点を指摘した。

その分類に際しては、まず、従来の意味カテゴリーを捉えなおし、主格維持性と限界性（具体的な状態変化を伴うか否か）という二つの意味素性を基準として立てた。そして、個別具体的な場面での「ている」「てある」のアスペクト的な意味を動作継続1、動作継続2、結果維持、結果状態の4種類に分類した（表1）。

表1 「ている」「てある」の意味分類

	主格維持性	限界性
動作継続1	+	-
動作継続2	-	-
結果維持	+	+
結果状態	-	+

表1にあるように、動作継続1と動作継続2とは限界性が「-」、つまり具体的な状態変化をともしない点は同じだが、両者は主格維持性の有無によって対立している。現代語で示せば以下のようなになる（野田2010:2,3より）。

- (2) 須原君は現在本を読んでいる。 …動作継続1
- (3) 孫助は現在うたた寝をしている。 …動作継続2
- (4) 東四郎は現在上司にしかられている。 …動作継続2

主格に立つものによる意図的な維持的動作である(2)は動作継続1に属し（〔＋主格維持性〕）、一方、主格に立つものによる意図的な動作とは解釈しがたい(3)や、主格に立つものが動作の受け手であり、能動的な動作主とは解釈できない(4)のような例は、〔-主格維持性〕である動作継続2に分類される。

「結果維持」と「結果状態」は主格維持性によって分かれる点では2種の動作継続と同様だが、事態を限界的なものとするという点が異なる。(5)では主格に立つ「猫」によって隠れた後の状態が維持されている（＝結果維持）のに対して、(6)では「川」によって濁った後の状態が維持されているとは解釈されない（＝結果状態）。

¹ 野田（2010:4）で述べたように、『今昔物語集』（1120年以降成立）を資料として選択したのは、時期的に「たり」「つ」「ぬ」を中心とするアスペクト体系から「ている」「てある」「た」を中心とする近代的な体系に移行していく初期の段階にあり、「ている」「てある」の原初的な段階を示すのに適した資料だと考えるからである。また、同時期の作品に比して、広範な動詞の種類にわたる「ている」「てある」の用例が採集できるという利点もある。

- (5) 先ほどから猫が警戒して木陰に隠れている。 …結果維持
 (6) 昨日の台風で川がひどく濁っている。 …結果状態

以上の分類基準に加えて、事態の時空間的な個性の基準も合わせてVテイル・テアルの使用の分布について示した(図1)。『今昔物語集』の時代にはVテイルの使用が、[+個性, +主格維持性]であるBに限定されており、それ以外の場合には「てある」が選択される傾向が強いというのが野田(2010)の結論である²。さらに、『四河入海』などのデータを参考に、時代を降ると選択要因としての「個性」が弱まり「主格維持性」を主軸とする体制に傾斜していくという通時的な見通しを立てた。

図1で、動作継続1と結果維持の両者がVテイルの選択傾向の強いBに属しているように、少なくとも『今昔物語集』の時代においては、限界性が形式選択に関与していないという点をここに付け加えておきたい。

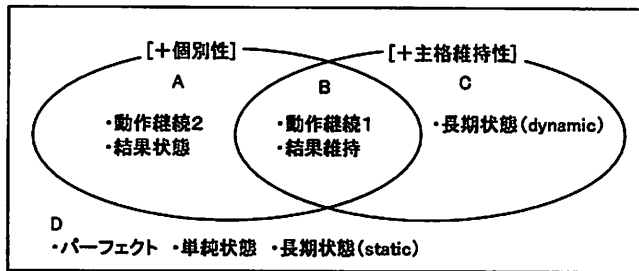


図1 『今昔物語集』の「ている」「てある」の使用領域

3. 福嶋(2011)の批判:「Vテイル・テアル」という表記について

福嶋(2011)の全体の論旨は、アスペクト形式としての「ている」がいつ成立したか、および、「ている」を含む近代語の「時間表現の体系」が現代語に向かってどのように推移していったか、という2点に集約される。野田(2010)への批判は前者の「ている」の成立についての議論の中に含まれるものであり、その批判は主として論述で用いる「Vテイル」の言及対象の問題に向けられているように思われる。その点を明確にするために以下に該当箇所を引用する。

野田高広(2010)が論文中で挙げている『今昔物語集』の～テイルの用例をみると、筆者がみる限り、そのほとんどが、明らかに、～テイルの用例ではなく、～テキタリの用例である。この点、決定的な問題があると思われる。(福嶋2011:127)

一見して分かるとおり、13例中、(18)(20)(23)を除く10例が、～テイルではなく、～テキタリの例である。さらに、全例～テキタリということでもないことから、両形式を区別

² 工藤(2002:75-76)、安・福嶋(2005:140-141)では、日本語のアスペクト体系は存在動詞から文法化した形式を中核とすると述べているが、「太子ニ三人ノ妻有リ。(『今昔物語集』二・四)」のような所有を表す「あり」の存在や、英語においてhaveで表されるパーフェクト・習慣の意味が「てあり」によって表されていたことを考慮に入ると、「てあり」が優勢な中世前期の日本語では所有動詞からの文法化によって説明することも可能である。

なく扱っていることが分かる。ここから、野田高広 (2010) の報告にあった、Vテイルの用例数 182 例も、ほぼ同じような状況ではないかと推定できる。なお、筆者が『今昔物語集』で確認してみたが、～テイルの例がまとまって存在するという事実は無かったことを付け加えておく。／当然のことながら存在動詞イルを形式の中に組み込む～テイルという形式と、古代語の形式である～タリの状態性を保持していると考えられる～テキタリという形式は、別の形式である。(福嶋 2011: 128)

繰り返すが、存在動詞イルを含む～テイルと、～タリの状態性を保持した「キタリ」という存在表現を含む～テキタリとは、関連があるとしても明らかに別の形式である… (福嶋 2011: 130)

野田高広 (2010) が～テイルの例としているものは、実は、ほとんど～テキタリの例である。『今昔物語集』の中には、アスペクト形式～テイルのまとまった用例はない。(福嶋 2011: 132)

このように、野田 (2010) での「Vテイル」について、そこで扱われているのは「てゐたり」であって「ている」ではないのだと繰り返し主張する。これは字義通りにみればもっともな指摘であって、たしかに『今昔物語集』において「たり」や「ぬ」「て」を後接しない「てゐる」の用例は少なく、以下を含めた 10 例程度しか見当たらない。

- (7) 其ノ妹ヲ質ニ取テ、刀ヲ差充テ抱テ居ケリ。家ノ人此ヲ見テ驚キ騒ギ、(『今昔物語集』二三・二四、岩波日本古典文学大系 4 巻 267 頁)
- (8) 舅、「只御セ。己ガ侍ムニハヨモ然ル事不有」トイヘバ、恐シク思テ居ニ、生贄、「吉々、己ガ命ヲバ不断。」ト言テ、(『今昔物語集』二・八、同 4 巻 438 頁)

さらに、助動詞「けり」や接続助詞・終助詞の後接例を除いた「…テ居ル。」という形での純粋な単独用法に限定すると、『今昔物語集』にはそのような文末用法は 1 例も存在しない。

詳細は 4.1 で述べるが、「ゐたり」から「ゐる」という変化については、筆者も金水 (1982; 1997) 等を始めとする先行研究に同意する立場にある。そして、拙論での「Vテイル」という表記は、これら先行研究に対する反発ではなく、「てゐたり」と「ている」の連続性 (後述) を認める立場からの、両者を代表した形での表記であることを明記しておきたい。野田 (2010) ではこれらを前提として、いわば暗黙の了解として議論していたのである。その意識は、拙論の用例掲出の際に「たり」を含む形で付した下線や、用例 (30) (以下(9)として再掲) についての注 14 に述べた「(30)はタリ後接形ではないのだが、又形によって「～てゐたり」とほぼ等価のアスペクト的意味を表している」と判断した。」という文言にも現れているのだが、紙幅を惜しまずに本文中に明記する必要はあったかもしれない。

- (9) 「…此ノ国ニ渡リ給テ、甲斐无テ返ナムハ、震旦ノ為ニ面目无カルベシ」ト、返々ス恥シメ云ヒ聞カセテ、我レハ又本ノ所ニ隠レテ居ヌ。暫許有レバ、人ノ音多クシテ下ヨリ

登ル。(二〇-二; 4-147)

そもそも、古典日本語に限らない諸分野の研究者を対象とする学術誌において、そのような前提を明記せず誤解を招くような形で論じたのは問題であったし、さらには、「Vテアル」という表記についても、『今昔物語集』の時代の動詞の活用体系を考慮に入れれば、その代表形としてはラ変活用形の終止形である「あり」とするのが適切であって、「Vテアリ」と示す必要があったとも言える。

しかし、たとえ野田(2010)で提示の仕方に不備があったことを認めたとしても、『今昔物語集』の「てあたり」は近現代の「ている」に連続するアスペクト形式として扱うべきだと考える。これについて次節以降で詳細に述べていく。

4. 「あたり」と「いる」の連続性

福嶋(2011)は柳田(1991)などの先行研究を紹介しつつ、アスペクト形式としての「ている」の成立は15世紀以降であると主張する。前節の引用からも、その根拠としては「てあたり」と「ている」という形式上の相違が重視されているのは明らかである。この形式的な違いを重視する立場であるならば15世紀前後に不連続面を認めることになるかもしれないが、両形式の連続性を認める筆者の立場からはそのように考えることはできない。福嶋(2011)による批判のうち、「Vテイル」という提示の問題について述べた3節に続いて、本節では「てあたり」「ている」の構成要素である「あたり」「いる」の変化に焦点を当てて、統語的な観点から福嶋(2011)の指摘の問題点を論じる。

4.1. 「あたり」から「いる」への推移

ここで、柳田(1991)、金水(1997;2006)を参考に存在動詞「いる」の中古から中世以降への形態と意味の変化についてまとめておく。

「いる」は古くは動いている状態から静止状態への変化を表す完結相(= perfective)動詞であったために、変化後の現在の状態を表すためには非完結相(= imperfective)を表す「たり」が後接する必要があった³。しかし、時代を降り、「たり」が「た」への形態変化とともに単純過去を表すようになっていくのにしたがって、「あた(り)」という形式では非完結的な意味を表わすことが困難になった。もはや「あた(り)」という形式では以前のように現在の存在を表すことができなくなり、その移行期においては「あた(り)」形式が現在と過去との曖昧性を孕むことになったのである。そこで、「いる」が単体で非完結的な意味を表わすようになった。「あたり」から「いる」への変化の要因はこのように説明される⁴。

さらに、金水(1997:248-249)では、「あたり」から「ある」への移行の中間段階として、現在の存在を表す「いた」を想定しており、以下のような例を挙げる。

³ 野村(2007:56-58)は金水(2006)で上代の「ある」を変化動詞とみなすことに疑義を呈する。実際に『今昔物語集』にも「ある」自体が非完結的(状态的)な意味を表す例は存在しており、慎重な検討を要する問題ではあるが、当面の議論では金水(2006)の説に従う。

⁴ 「たり」の通時相については山口(2003:225-271)参照。

- (10) 処士ハツカハレイテイタソ 夫トモタイテイタ女ヲ処女ト云フト同者ソ (孟求抄〈寛永一五年製版本〉・六・三九〇)
- (11) 尺蠖ノ虫 (=しゃくとりむし) ノカ、ウテ居タハノヒウ用ソ 臥龍ハトハウ用ソ (孟求抄〈古活字本〉・一・5ウ)

(10)(11)はそれぞれ、「処士」「尺蠖ノ虫」についての語釈を施している箇所であり、「使われないでいる」「かがんでいる」というように現在の状態を表す例として挙げられている。このような現在の状態を表す「いた」を設定することによって「みたり」から「いる」への形式の推移がより自然に説明されそうなのだが、そのように考える場合、「似る」などの一部の動詞群の存在が問題になってくる。なぜなら、これらの動詞は現在を表す「た」の段階を有しながらも、「いる」のように後世に単独で現在の状態を表すようにはなっていないからである。

この現在の状態を表す「た」に関して補うと、此島 (1973: 246-247) は「現代にはないような動作態的な用法」として以下の例などを挙げる。

- (12) 漢書ニハ項字ヲ削タソ (史記抄・一三)
- (13) ある犬、肉を含んで川を渡るに、その川の真中で、含んだ肉の影が水の底に映つたを見れば... (天草本伊曾保 犬が肉を含んだ事)
- (14) ...かえつてわが名を汚すに似た (天草本伊曾保・獅子と鼠の事)
- (15) ...わが母にくらひつくはまことに畜類にも劣つた (天草本伊曾保・母と子の事)

此島 (1973) はこれらについて、「現代なら存在態「…ている」(「知っている・削っている」等)に当る表現」としており、さらには、「…に似た人」「畜類にも劣つた人」のような現代語の連体修飾用法について「古い存在態の用法が局限されて連体法に残存している」とも述べている。

話を戻すと、「似る」などが「ている」や「である」の後接が義務的になっていく⁵のに対して、「いる」に限ってル形の現在用法が許容されるようになるというのは不均衡なのである。そこで金水氏は存在動詞の「あり」に注目し、古くから単独で現在の存在を表すことができた「あり」からの類推によって現在の存在を表す「いる」が現れたのではないかと推測する。以下にそれぞれの形態の推移を示す。

(16)	平安時代		室町時代前後		近現代
	に-たり	→	に-た (に-てあり, に-ている)	→	*にる, に-ている
	み-たり	→	いた	→	いる
	あり	→	あり	→	ある

さらに、金水 (1997) では、この、現在の存在を表す「いた」のみが現れる資料は存在せず、

⁵ 『四河入海』(1534年成立)の「似る」には、「た」とともに「ている」「である」も存在する。
 ・其ヲ物ニタトヘバ蚕ノ綴簇ニ似タソ 蚕老テ煮ラレウトスル時ニ簇ホサレタニ似タソ (四河3巻550頁 ※ 勉誠社『抄物大系別巻 四河入海』の巻数と頁数。以下同)
 ・ヨイ青ニ似タソ 小人ドモガサル人ニ似テイルソ (四河2巻444頁)
 ・サテ蝦珠ニモ似テアルガ是ヲバ文登ノ海上ヨリ得テ有ル程ニ... (四河4巻863頁)

室町期においてはむしろ過去を表す「いた」の方が多いことについても注意を促しているように、実際には当時のアスペクト形式は新旧の形態が混在しているのだが、これは新たな段階に推移していくさまを表していると考えられる (cf. Hopper & Traugott 2003: 124-126)。

このように存在動詞「あたり」はアスペクト形式「たり」の意味変化に伴って「いる」への形態変化を遂げている。これを存在動詞の通時相として見る場合、この「あたり」から「いる」への形態変化には連続性を認めなければならないと筆者は考える。アスペクト体系の推移を研究する立場として、この形態変化を言語形式の発達の連続的な局面として記述することが十分に可能であることを次節以降で示す。

4.2. 文法化：融合と再分析

本節では「あたり」から「いる」への変化が連続的な段階として捉えられることを示す。以下では、その変化を単一的な構造への融合 (fusion) のプロセスと、「たり」の意味変化に伴う再分析 (reanalysis) のプロセスという二つの段階に分けて説明する。

まず最初に、第一段階の融合のプロセスについて考えるために、フランス語の単純未来形の文法化について紹介したい (Hopper & Traugott 2003: 52-55)。現代フランス語の単純未来形 (*je chanterai*) はラテン語に起源が求められ、ラテン語では以下のように人称・数・時制が屈折によって融合的な形で表された。

- (17) *cantabo*
sing-1SG:FUT
'I will sing'

このようにラテン語では単純未来の意味は融合的な形式で表されていたのが、時代を降ると以下のように *habeo* (所有、所属する) に動詞の不定形が後接した形に交代し、さらに、3世紀から6世紀の間には(19)のように *habeo* が動詞に後置されるようになっていく⁶。これがフランス語の *je chanterai* などのロマンス諸語の屈折的な形態に引き継がれている。

- (18) Haec habeo cantare
these have-1SG:PRES sing-INF
'I have these things to sing'
- (19) ... et quod sum essere habetis
... and what be-1SG be-INF have-2PL
'and what I am, you have to/will be'

これは時系列的には(20)のように捉えられる。このうち、*kanta b^humos* は再構された形で、*b^humos* は 'we are' にあたる動詞形態である。この存在動詞が後置された形がラテン語の *cantabimus* の祖形だと推定されている。前述の経緯によりロマンス諸語の単純未来形の起源は

⁶ ここに引用したのは7世紀の文献だが変化は3-6世紀に進行したと推測されている。

ラテン語の *cantare habemus* に求められるわけだが、さらに、現代フランス語では、単純未来形 *chanterons* と近接未来を表すとされる “*aller* + 動詞不定形” が競合する形となっている。

(20) *renewal* (Hopper & Traugott 2003: 9)

Pre Latin		Latin		French
*?				
* <i>kanta b^humos</i>	>	<i>cantabimus</i>		
		<i>cantare habemus</i>	>	<i>chanterons, allons chanter</i> > ?

ここで注意したいのはラテン語とフランス語というそれぞれの時代において、*cantabimus* / *cantare habemus*, *chanterons* / *allons chanter* というように融合的な形式と迂言的な形式が並存しており、その中の迂言的な形式が融合的な形式へと変化を遂げている点である。このラテン語からフランス語への推移のプロセスは以下のように捉えることができる (Hopper & Traugott 2003: 54-55)。

(21)	Classical Latin	[[cantare] habeo] >
	Late Latin	[cantare habeo] >
	French	[chant-e-r-ai]

古典ラテン語においては [[cantare] habeo] というように、主動詞 *hab-* に補部 (complement) として動詞不定形の *cantare* が従属するような統語構造をなしていたのが、義務や未来を表す文脈において多用される中で、[cantare habeo] という隣接した構造が未来を表す形式として捉えられるようになっていく。このプロセスの中で形態素間の境界がなくなり音韻的な弱体化が起こって単純未来形が成立したとされる⁷。

ここで日本語に話を戻すと、前節で紹介した「あたり」から「いる」への変化の第一段階として、「あたり」の内的な構造変化を想定してみる。すなわち、「あたり」が非完結的 (状態的) な意味で多く用いられるうちに、[[*あ*] たり] という階層的な構造から [*あ* たり] という単一的な構造へ変化し、形態素の境界がなくなったという過程である。これは意味的な対応関係をみると、[[*あ*] たり] という分析的な段階は完結相動詞としての「ある」に非完結相化 (状態化) 形式の「たり」が後接した結果状態 (止まるという変化後の状態) という意味が対応し、また一方、融合して単一構造となった [*あ* たり] の段階は、過去の変化が捨象された現在の存在という意味が対応する。この分析的な [[*あ*] たり] から融合的な [*あ* たり] への構造変化は、上代には「ある」に「たり」が後接する例が存在せず、「あたり」という語連続が現れるのが中古以降であるという事実 (金水 2006: 53) からも予測されることであろう。

しかし、実際には平安時代以降でも、結果状態的なものと現在の存在を表すものとは混在するようである。例えば、以下の(22)の「見レバ」に明示的なように眼前の存在を描く「あたり」

⁷ この変化について補うと、フランス語の単純未来形が体系的に現れ出すのは『ストラスブールの宣誓 (*Les serments de Strasbourg*)』(842年)からということ、この単純未来形への移行が促進された背景として、ラテン語の単純未来形の三人称単数形と一人称複数形が単純過去形のそれらと形態的に紛らわしいために忌避されたという事情がある (渡辺 2009: 124)。

の例がみられる一方で、金水（2006: 53）からの用例(23)のように、平安末期でも「座る」という語彙の意味を保ち、着座の結果状態を表す例は存在する（語彙の意味の問題については 5.1 で述べる）。

(22) ... 馬ヨリ下リテ、其小家ニ入ヌ。見レバ、姫一人居タリ。馬ヲモ引入テタ立ヲ過サムトスルニ、家ノ内ニ平ナル石ノ、碁枰ノ様ナル有。『今昔物語集』二六・一三; 4 卷 450 頁)

(23) 我モ人モ皆ハチスノ花ノウヘニキタリ（法華百座開書抄・オー八八）

これは解釈的に微妙な問題であり、その推移を直線的に辿るのは難しいと思われるが、平安から鎌倉期の用例について「特定の空間における静止・滞在の維持という意味は、存在表現、特に空間的存在文に極めて接近しているということも間違いない（金水 2006: 54）」と説かれるように、「みる」への変化の前段階としての空間的存在文への傾斜を想定するのは無理なことではないだろう。平安・鎌倉期での分析的な [[みる] たり] と融合的な [みたり] との並存は、前者から後者への推移の過渡的な段階を反映するものとして捉えられる。

次に、平安時代の「みる」において「たり」の後接傾向が非常に強かった点を示す。金水（2006: 152）の表 7 によると、『源氏物語』では「みたり」や尊敬語を介する「みたまへり」と合わせて 97 例（みたり 58 例；みたまへり 39 例）が見られるのに対して、「たり」「たまへり」を後接しない例は 23 例となっており、「みる」の全例に対する「たり・り」の後接例の比率は 80.8% という高い数値を示す⁸。この後接例の比率が高いことを示すために、表 2 に鈴木（1999）の表 I・II より使用頻度の高い動詞（30 トークン以上の全例）を抜粋する。

表 2 鈴木（1999: 左 1-5）より

	基本形	つ	ぬ	き	けり	たり・り	たり・り/総数
いふ（言）	103	2		6	14	8	6.02 %
かく（書）	20				2	39	63.93 %
かたらふ（語）	50	1					0.00 %
きこゆ（聞）	406	4	4	5	31	52	10.36 %
とふ（問）	32						0.00 %
のたまふ（宣）	215	3		8	14	12	4.76 %
まうす（申）	53	1		1	5	3	4.76 %
いづ（出）	39		54		2	8	7.77 %
かへる（掃）	17		19		6		0.00 %

⁸ 「籠りみる」「ついみる」等の複合動詞では、「たり・り」の後接率は 67.9% であり、複合動詞以外の「みる」と比して若干低い数値を示す（みたり 78 例；みたまへり 91 例；それ以外 80 例）。また、『源氏物語』（岩波新日本古典文学大系）を確認したところ、以下のような「て」後接例が見られる。鈴木（1999）は考察対象を主節末用法に限定しておりこれらは集計には加えられていないのに対して、金水（2006）では従属節での使用も対象になっているようである。金水（2006）の数値からこれらの「て」の例を除外すれば、「たり・り」後接例の比率はさらに高いものとなるだろう。

・渡殿の戸口にしばしみて、声聞き知りたる人に物などのたまふ。（竹河：4 卷 280 頁）

・東の渡殿にあきあひたる戸口に人々あまたみて、もの語りなどする所に...（蜻蛉：5 卷 311 頁）

まかづ (罷出)	14	1	13	1	1	8	21.05 %
まゐる (参)	87	5	24		6	97	44.29 %
わたる (渡)	35		26		2	48	43.24 %

語彙的なばらつきは見られるものの、動詞一般に較べて「ゐる」の「たり・り」後接率が高いことは明らかである。この中の「書く」については、以下の(24)(25)のように、書いた結果である文字の存在に焦点がある例への偏りを示すのだが、これは後世の「字が (<を) 書いてある」という構文への特殊化の前段階として捉えられるだろう。なお、「まゐる」「わたる」などの移動動詞への後接例も比較的高い数値を示しており興味深い、それでも「ゐる」の比率の半分程度であってここでの議論では問題にならない。

(24) 帰り給ひて、まづこの袋を見給へば、唐のふせむれうを縫ひて、「上」といふ文字を、上に書き
たり。(橋姫・岩波新日本古典文学大系 4 巻 333 頁)

(25) 「あはれ知る心は人にをくれねど数ならぬ身に消えつつぞふる／代へたらば」と、ゆへある紙
に書きたり。(蜻蛉・同 5 巻 296 頁)

このように、「ゐたり」または「たまふ」を介する「ゐたまへり」という「たり・り」を後接する形式が平安時代においてある程度一般化していたことは確かなようで、『源氏物語』の状態からすると、「ゐたり」という形式での単一構造化は遅くとも平安時代の中期にはかなりの程度進行していたと考えられる⁹。形態変化は伴わないものの、この [[ゐ] たり] から [ゐたり] への単一構造化のプロセスは、ラテン語からフランス語の単純未来形への変化過程に見られる融合の過程と同様に考えられるだろう¹⁰。

次の段階として、単一的な構造をなすに至った「ゐたり」から「いる」への変化は再分析のプロセスとして捉えられる。ここで、フランス語の否定構文 *ne V pas* の変化をとりあげたい (Hopper & Traugott 2003: 65–66)。もともとフランス語の否定構文は *ne V* という形で表すことができ (以下(26)の I)、*pas* ‘step’ は移動動詞の否定構文で任意に用いられる強意を表す形式であった (II, III)。それが時代を降ると移動動詞以外にも用いられるようになっていき (IV)、*ne V pas* 全体が否定構文として定着し、*pas* は *ne* と共に義務的な成分となる (V)。そして、次の段階では再分析的に *ne* が任意成分として捉えられるようになり、現代の口語では *pas* が義務的な成分と解釈され、*V pas* という形で否定を表すことができるようになっていく (VI)。

(26) I. *ne V*

⁹ 「ゐたまへり」という複合的な形式について単一構造化が進行したというのは雑駁に過ぎるかもしれない。金水 (2006)、鈴木 (1999) のデータに含まれていることもあって言及したが、語彙交代を伴う「(て) ござあり」への推移などの背景を考慮する必要があることから「ゐたまへり」については保留として、ここからの議論は「ゐたり」に絞る。

¹⁰ ここでは問題にしないが、「ゐたり」の単一構造化のプロセスを、存在動詞という語彙項目への変化と考えれば、文法化というよりむしろ語彙化 (lexicalization) とするべきかもしれない。

- II. Il ne va (pas).
 He not goes (step)
- III. ne V_{movement} (pas)
- IV. ne V (pas)
 Il ne sait pas.
 he not knows not
- V. ne V pas
- VI. (ne) V pas, or V pas
 Il sait pas.
 he knows not

この中で重要なのは、*ne V (pas)*というようにもともと *pas* は付加的な要素であったのが、*ne V pas* 全体が単一的な構文として解釈されるようになった結果として、その後の段階では否定の意味の中心が *pas* に転移して (cf. *Il ne sait.)、現代口語フランス語では *ne* が任意的な要素となっている点である。

このフランス語の否定構文の変化に即して「あたり」から「いる」への変化について示すと、平安・鎌倉期に現在の存在を表す形式として単一的な構造をなしていた「あたり」が、「た(り)」のテンス的意味の獲得に伴い「居る+過去助動詞」と分析的に解釈されるようになり、従来表していた現在の存在という意味との不整合から「た(り)」自体が脱落したということになる。Hopper & Traugott (2003) では、*ne V pas* という単一的な構造から *ne* が任意成分である (*ne*) *V pas* へと変化した直接的な要因は示されていないが、日本語の「あたり」から「いる」への変化はアスペクト形式の「たり」の変化との相互作用から説明される。これは、フランス語の否定構文において、否定の意味の中心が、*ne* → *ne (V) pas* → *pas* のように転位していったのと同じように、従来「み-たり」の中で「たり」が担っていた非完結的(状態的)な意味が、現在の存在を表す単一構造「あたり」全体に転位し、その後の「たり」の意味変化に起因する再解釈により「み-たり」の中の「ある」に転位したということになる(あたり → みたり → みる)。

このように「あたり」から「いる」へ推移は単一構造への融合と再分析によって段階的に捉えられることができるのだが、さらに、この単一構造への変化という観点からは、前述の現在の状態を表す「た」について以下のように考えることができる。先に金水(1997)や此島(1973)から引用して述べたように、抄物・キリシタン資料・狂言台本に見られる現在の状態を表す「た」は、「ある」のほか、「似る」「聳ゆ」などの具体的な動作を表さない動詞への偏りを示す。「ある」が「たり」後接形(「あたり」)での使用頻度が非常に高かったのは前述の通りであり、「似る」についても『今昔物語集』の用例を確かめると否定形や接続助詞「て」の後接形を除けば殆どの例が「たり」後接形であられる。これらの動詞への義務的といってもよい「たり」の

使用は、「動詞＋たり」という形での単一的な構造へと変化する契機として捉えられる。「いた」「にた」という過渡的な形態はその融合的な構造の残存であり、これらは単一的な構造を保ちつつ、「ゐたり>いた」「にたり>にた」というように語末に音声的な弱化が起こった。その一方で、「行く」「食べる」などの具体的な動作を表しう動詞は「ゐる」「似る」のように「たり」が後接する義務はなく、その頻度も低かったと考えられる。この拘束性の低さのため、単一的な構造としては捉えられることはなく、「動詞＋過去助動詞」というように分析的に捉えられやすかった。その結果、現在を表す場合には「た」が避けられ、「ている」「てある」などの形式へスムーズに移行できた¹¹。この室町期に見られる現在を現す「た」の出現（残存とも言える）は、「ゐたり」において融合が進行していた傍証としても捉えられるだろう。裏づけが必要なのは当然ではあるが、現段階ではこのように考えている。

ここまで、「ゐたり」から「いる」への推移が連続的な構造変化として捉えられることを示してきた。野田（2010）で「Vテイル」という抽象的な表記を用いたのはこの連続性を重視してのことである。「てゐたり」と「ている」は形態が異なることにはまったく異論はないが、現在の状態を表す構文としての連続性を重視する筆者の立場からはそこに不連続面を設定することに大きな意味はないと考える。

これに関連して、福嶋（2011）は以下のようにも述べる。

... ～テイルと～テキタリの関係は、～タと～タリの関係ほど直接的ではない（形態の一部が消失したというレベルではない）。（福嶋 2011: 130）

この部分の前には『万葉集』における～タの研究」というような論文のタイトルは考えられない旨が述べられている。『万葉集』のタが奇妙だという点は筆者も同意で、この場合はやはり『万葉集』における～タリなどとしなければならぬと思う。しかし、その根拠は福嶋氏とは大きく異なる。確かに、福嶋氏の述べるように、「たり」と「た」の関係は「形態の一部が消失したというレベル」かもしれないし、また、助動詞「たり」がまるまる欠落しているのだから「てゐたり」と「ている」との関係は「形態の一部が消失したというレベルではない」かもしれない。しかし、福嶋（2011）の「直接的」がどのような意味で用いられているとしても、「けり」と交代すると共に単純過去というテンス的意味を獲得するに至る「たり」から「た」への変化は、現在の（動作の）存在という意味的な同一性を保つ「(Vて) ゐたり」から「(Vて) いる」への変化に較べて遙かに大きい¹²。

また、福嶋（2011）は「ている」の成立について以下のように述べている。

存在動詞イルの成立が15世紀以降とされているので、存在動詞イルを組み込む形式である～テイルの成立も、15世紀と考えられている。（p.121）

¹¹ 現代語の、「似る」を含む「第四種の動詞」（金田一1950）にも同様の議論は成り立つ。これらの動詞は単一的な構造への変化が進行しているため、もし将来「ている」が新形式に交代しても、これらに後接する「ている」は残存する可能性が高いのではないだろうか。

¹² ここでは「ゐた（り）」全体を問題にしているのであって、「ゐたり」の中の「ゐる」「たり」という構成要素に限ってみれば大きな変化を伴っていることは言うまでもない。

これは金水（1982）や柳田（1991）を踏まえた上で述べられている。これが形式面に限定しての記述であるならばもっともなことであるが、本動詞と補助動詞との意味・形式面での関係から考えるとこの見解は大きな問題を孕んでいると言わざるを得ない。ある語彙形式がなんらかの変化を遂げた場合、それを要素とする文法形式も並行して変化を遂げるかどうかというのは自明だとは言いがたい問題だからである。例えば現代語の「ている」において、その構成要素である「いる」がもし今後新たな意味や形態の変化を遂げた場合に「ている」も影響を受けて意味や形態の変化を被るかという点と必ずしもそうとは言えないように思われる。しかし、そうかといって本動詞と補助動詞との間に相互作用的なものは全くないとも言切れないだろう。当然、両者の使用環境は異なるのであって、少なくとも、ある形式が文法形式として確立している場合にそれが常に本動詞と並行して変化するという論理的根拠は見当たらないように思われる。本節では暫定的に本動詞の「いる」をアスペクト形式「ている」の要素の「いる」と同等に扱っているが、アスペクト形式が受ける本動詞の意味変化の影響については議論の余地が大いに残されている。

5. 語彙形式と文法形式

「あたり」と「いる」の連続性を示した4節に続いて、本節では野田（2010）で扱った「てあたり」という形式をアスペクト形式とみなすべきか否かについて検討する。本節での議論を通して『今昔物語集』の「てあたり」には、後世の「ている」「である」と同様、アスペクト形式とみなすのに十分な根拠があることを示す。

5.1. 意味の抽象化

最初に、「ている」の構成要素である「いる」が語彙的意味を保存しているか否かについて考えてみたい。これまで見てきたように、福嶋（2011）は形態面の変化に重きを置く立場にある。それゆえ野田（2010）において「てあたり」と「ている」の二つの形式を「Vテイル」という同一の表記で示した点に批判が集中するのはもっともなことであり、アスペクト形式としての「ている」の成立を15世紀以降だとする福嶋氏の主張はその形態を重視する立場からの当然の帰結であるとも言える。そして、この形態面を重視する立場は意味の方面にも波及しているようであり、実際に、野田（2010）で扱う『今昔物語集』の「ている」の例について、それらは本動詞的な意味を表すものであって、アスペクト的な意味を担っているのではないというような主張も見られる（p.128の脚注3）。しかしながら、その一方で、アスペクト形式として解釈が可能な例の存在を認めているような側面もある。以下に引用する。

可能性として、『今昔物語集』の～テキタリや～テアリをアスペクト形式として捉えて、記述を試みるという方向もあり得ると思う。ただし、それは、～テイルの研究ではないし、何より、先行研究を検討してからの議論である。（福嶋 2011: 131 脚注）

このような意味（＝アスペクトの意味）では、用例の解釈しだいによっては、『今昔物語集』

(あるいはそれ以前の資料)にも、～テイルの例がみられるといおうと思えばいえなくもない。しかし、仮にそのような例をもって、～テイルの成立を考える研究(あるいは、～テイルの成立は、存在動詞イルに先行するという研究)を行ったとしても、用例はかなり限定されたものになるだろう。(福嶋 2011: 132)

このように、若干の歯切れの悪さはあるものの、福嶋(2011)は拙稿の「てみる」「てみたり」という形式について、少なくともその全使用例が本動詞的な用法であると主張するわけではないようである。

ここで野田(2010)の背景を述べると、そこでは「ている」182例・「てある」427例の用例を採集した上で検討している。データの中には本動詞としても解釈しうるものも多く含まれるがそれらを選別することはあえてせずに、いずれにも解釈されるものも含め広範な例を分析対象としている。そして、挙例に際しては、そこに常に付きまとう選択の恣意性を避けるために、使用頻度の高い前接動詞の例をその全例が確認できるような形で提示し、そうして「ている」と「てある」の違いを抽出している¹³。前接動詞の種類が一部に限定されているのはこの事情による。

さて、野田(2010)で扱った「Vテイル」において、「みたり」が本動詞的な意味を表しているか否かという問題に戻ると、筆者の立場として、アスペクト形式としての意味を認めると同時に、本動詞的な意味が観察されることについても否定しないという立場をとる。

- (27) 其ノ屋ニ将入レテスヘツ。■(諸本欠字)ヲ持来テ食スレバ、僧此ヲ食ヒテ居タル程ニ、男、僧ニ「暫ク此テ御セ。己ガ无ラム程ニ努々此レ不臨給フナ」ト云置テ…(一九-三三; 4-128) [野田(2010): 用例(19)]
- (28) 程无ク投返シ遣セタリケレバ、佐太、「物縫シテ居タリト聞クナベニ、疾ク縫テ遣セタルカナ」ト、僂ラカナル音シテ讚メテ、取テ見ルニ…(二四-五六; 4-354) [野田(2010): 用例(20)]

福嶋(2011)にも挙げられるこれらの例において、「食べながら/裁縫しながら、座っている(じっとしている、静止している)」というように強硬に「みたり」の語彙的な意味を主張する立場もありうるが、筆者としてはアスペクト形式として動作が進行中である意味を表しつつも、それでも「みたり」の語彙的な意味は保存されていると考える。このどちらとも捉えられるという点が重要なのであり、この曖昧性があるからこそ意味的な変化が進行する。これに関しては、現代語の「ている」でさえ純然たるアスペクト形式であるとはいいがたい側面がある。

- (29) 向こうに人が立っている。
- (30) 公園で子どもたちが遊んでいる。

¹³ 原理的には内省が利かないはずである古典語資料の意味を、作品の解釈を通して分析するという再帰的な作業を繰り返して得られたものであり、その「分析」の対象は広範な動詞タイプにわたる全例に及ぶことを強調しておきたい。

このように「ている」は項として二格もデ格もいずれもとることができる。しかし、厳密には、二格をとる(29)について、この「いる」を存在動詞とみなして「向こうに人がいる」という存在文と同様だということが可能である一方で、デ格をとる(30)は「??公園で子供たちがいる」というようにデ格のままでは不自然になる。これは「遊ぶ」が典型的な動作を表す動詞であるという語彙的な要因によるものであり、(30)の後項動詞の「いる」には存在動詞の意味は希薄だと考えられる。続いて前項動詞に注目すると、(29)の「立つ」は「いる」と二格を共有すると考えることはできず、「向こうに人がいた」が問題ないのに対して、「??向こうに人が立った」というのは不自然である。一方の(30)では、「公園で子供たちが遊んだ」は言えるが、「??公園で子供たちがいた」は不自然である。このように、前項動詞の語彙的な制約は無視できないものであり、様々なタイプにわたる個々の動詞を一律に扱うわけにはいかない。それゆえ、古典日本語についても項構造などの要因も考慮に入れて分析する必要があることは言うまでもない。こうした問題は看過できないものであり、詳細な検討が必要になってくるのだが、ここでは、「てあたり」に観察される存在動詞的な意味は現代語の「ている」にも観察されるのであって、古典語資料に限定されるものではない点を指摘するにとどめる¹⁴。

次に、複合動詞からアスペクト形式への連続性について考えてみたい。「いく・しまう」などのような、語彙の意味に移動経路を含む動詞は、それらが複合動詞の後部要素に位置する場合、語彙的な意味を保存しつつ、後項動詞の表す移動の意味がアスペクト的な意味へとメタファー的に拡張する傾向が強いと説かれる(大堀 2002: 192)。移動動詞の「いく」「くる」や使役移動動詞の「しまう」についてはこの説明があてはまるが、存在を表す「(て) いる」は元々移動を含まない表現であり、経路から相へという拡張は確認しにくいように思われるかもしれない。しかし、「(て) いる」でも、経路ということはできないが、空間から時間への転化は起こっている。例えば、「庭に猫が寝ている」という文は、現在時の、猫が特定の場所にとどまっている時間幅を考慮に入れることによって初めて成立しうる表現であり¹⁵、そこでは「いる」に含まれるアスペクト的な要素が前項動詞の時間的側面に作用し、現在における「寝る」という動作の持続という意味として現れている。空間的移動に時間が伴うというのは理解しやすいが、それと同様に空間的な存在にも時間の経過は随伴するのであり、時間経過を考慮に入れない空間的な存在というのは原理的に不可能なのである。それゆえ、「ている」についても「てしまう」「てくる」同様に空間的意味からの拡張が起こっていると考えてよいだろう。さらに言えば、空間座標での移動がない「いる」という動作は、時間的経過を考慮に入れて初めて認識されるという点で、純粋なアスペクト標識となる条件を備えているとあってよいかもしれない。このように、空間的移動の有無という違いはあるものの、後項動詞の時間的要素が前項動詞に対してアスペクト形式的な働きを担う点において、「ている」は「てしまう」などのアスペクト形式と同様に考えられる。「いる」が移動経路を表さない点を加味すれば、「ている」については空

¹⁴ 観点は異なるが、山下(1996: 42-43)でも現代日本語の「ていない」について本動詞的なものと補助動詞的なものとを並存を認めている。

¹⁵ 「中国にはパンダがいる」のような恒常的な「いる」はここでは問題にしない。現代日本語の習慣相とル形・テイル形の問題については野田(2011)で論じている。

間的静止から時間的持続への写像を想定すればよいだろう。

また、中古・中世の資料において、「消ゆ」のような不在に帰結する意味を表す動詞や、「歩く」のような移動状態¹⁶を表す動詞の後接例が存在しない点も重要である。この制約は、空間的に一定の位置にとどまった状態にあるという「あたり」の語彙的な意味と衝突することに求められる。これらは「てあたり」がアスペクト形式であるとする立場にとっては反証となりうるが、アスペクト的な意味が動詞文の存在理由だと考えるならば、そこで問題になるのは語彙的な意味の濃淡だけである。これらの現象は語彙的な意味が保存されていることを示していると考えれば十分であろう。

なお、『今昔物語集』にかぎらず、『源氏物語』などの中古作品では、その場面での存在や座っていることが前提となっているような文脈にも「てあたり」などの形式は使用されているようである。この談話的意味に関わる問題は解釈的な作業を通して示していくしかない。これについては稿を改めて論じたいと思う。

5.2. 連体修飾節の制限

福嶋 (2011) は『今昔物語集』の「てあたり」がアスペクト形式であるか否かという問題について、「同資料中 (= 『今昔物語集』) の～テキタリと～テアリを無条件にアスペクト形式としてよいわけではない (福嶋 2011: 131)」とも述べている。この文言からは、福嶋 (2011) は「てあたり」「てあり」をアスペクト形式とは原則としてみなさない立場にあるようである。そして、福嶋 (2011) が「てあたり」「てあり」がアスペクト形式ではないとする根拠は、山下 (1990) の議論に求められる。以下に山下 (1990) の論旨が端的に述べられている金水 (2006) からの一節を引用する。

山下 (1990) によれば「一てある (あたり)」「一てあり」が連体修飾を構成する場合、主名詞には主語か場所、時間を表す名詞しか来られないという。一方、「一たり」にはこのような制約は見られない。これは、「ある (あたり)」「ある」が存在を表す本動詞の用法を未だ保存していることを表す、すなわち文法化が十分進んでいないことを表すと見られる。
(金水 2006: 271)

これは福嶋 (2011) にも引用される部分でもあり、この山下 (1990) の連体修飾節に関する議論は、福嶋氏が『今昔物語集』の「てあたり」がアスペクト形式として未発達である（もしくはアスペクト形式ではない）とする意味的・統語的な根拠だと考えられる。そこで、以下では山下氏の連体修飾節の議論について検討する。

山下 (1990) は中世から近世にわたる詳細な用例調査に基づき、奥津敬一郎氏の連体修飾節についての説を取り込みつつ、興味深い議論を展開しているのだが、ここでは、山下 (1990) の議論をさらに整理・発展させている山下 (1996) を取り上げる。同論文は『今昔物語集』の「てあたり」「てある」の文を対象にして、連体修飾節の主名詞は「程」「間」などの抽象的な

¹⁶ 「??太郎は公園に歩いた」のようにこれらの動詞は移動そのものは表しにくく、「太郎は公園に向って歩いた」「太郎は公園に歩いていった」のように方向を表す後置詞や経路を表す表現が必要になる。

名詞や主格名詞句に限られており、目的語は主名詞にできないという指摘から始まり、その傾向がどのように推移していくかについて、抄物やキリシタン資料、浄瑠璃台本などの中世以降の資料の調査結果に基づき山下(1990)の議論を深化させている。これは統語的な側面から「ている」「てある」を扱った論考で、とりわけ関係節化の問題として類型論的にも非常に興味深いものであるが、原理的な問題を抱えているのも確かである。まず、第一に、従属節と主節とを一律に扱うことに問題がある。

Keenan & Comrie (1977) では名詞句の関係節化の可否による階層 (noun phrase accessibility hierarchy) が定められている。

(31) 主語 > 直接目的語 > 間接目的語 > 斜格 > 属格 > 比較の対象

ある言語において、(31)の階層の中で下位に位置する名詞句が関係節化できる場合、その上位の名詞句はすべて関係節化することができ、逆に、ある階層に位置する名詞句が関係節化できない場合、それ以下の階層の名詞句は関係節化できない。このように関係節化が可能な名詞句は階層構造をなしており、これは言語普遍的なものとされている。

Keenan & Comrie (1977) は言語普遍的な階層性に主眼があるのだが、ここでは、関係節化できる名詞句には制約があり、その制約が言語によって異なるという事実に注目したい。ここからすれば、「ている」「てある」を後接する文が目的語を関係節化することができないというのも、単に、古典日本語に見られる関係節化の制約だと考えられる。つまり、その制約はあくまで関係節での制約なのであり、関係節化で名詞句の制約があることがそのまま主節での状態を反映しているとは限らないのである。例えば、「釘が曲がった」と「曲がった釘」を比較すると、前者が単純過去を表すのに対して、後者は「さっき曲がった釘」という場合は単純過去と表すといえるが、時間副詞を伴わなければ現在の均質な状態に焦点があるアスペクト用法として解釈することもできる。典型的な動詞ではないが、先に引用した此島(1973:247)の「…に似た人」のような例は現在の状態であることがより明瞭であろう。この現在の状態を表す「た」についても、「たり」から変化したという通時的な背景を考えれば、これは「たり」の用法を継承しているともいえる。つまり、連体修飾節ではテンス的な意味とともにアスペクト的な意味が保存されていると考えることができる。しかし、だからといって「た」がテンス形式として未成熟だとは必ずしも言えないだろう。関係節で古態が温存されているからといって、その形式が主文末でも補助動詞化しておらず未発達であるという論理は成り立たないのである。

ただし、このように考える場合、一方の「たり」に制約が存在しないということは問題になる。なぜなら、「てゐたり」「てあり」に関係節化の制約がかかっているのなら、「たり」の方にも同様の現象が観察されるはずだからである。しかし、先に述べたのと同様、これは「たり」に関係節化の制約がないことを表しているに過ぎず、このことが、文末用法でアスペクト形式として成熟していることを示しているとは言えないだろう。

しかし、山下氏の連体修飾節での主名詞の制限の問題は古典日本語研究にとって新たな知見をもたらすものであり、今後はアスペクト形式を伴う形式に限らず、動詞単独の場合をも含め

た古典語の関係節化についての十分な調査をすすめる必要がある。単独の場合にさえ、どの程度の制約があるのかが明らかではないので、「てあたり」や「たり」に観察される制約の有無が有意なことなのかどうか分からないからである¹⁷。この問題は、前掲の、古い用法が残存しているとされる「似た人」「曲がった道」などの現在の状態を表す連体用法との関わりもあって、現代日本語研究にとっても重要な意味をもって来るだろう。

第二の問題点として、「補助動詞化の力と、イル・アルが独立した動詞であるとする力がせめぎ合いつつ一進一退を繰り返していた（山下 1996: 52）」と述べるように、それぞれの時代の資料について示される数値からは、補助動詞への推移が直線的なものとして捉えがたい点も挙げられる。山下 (1996) は「ている」「である」の補助動詞としての認定基準として、有生性 (animacy) を重視しており、以下のように述べる。

テイルのイルが独立した動詞であればこそ、連体用法で下接名詞に制限があると同時に、主格名詞の性情 (= animacy) に制限がある。もし、テイルのイルが補助動詞化していれば、イルは上接動詞に従属するだけの存在であって、自らのための主格名詞を要求するはずがない。従って現代語のテイルと同じように非情物が主格名詞である用例があっても構わないはずなのである。(山下 1996: 50)

存在動詞「いる」の主語の有生制約は古代語から見られるものであるが、山下 (1996) では、この制約が中世から近世前期上方語の「ている」に保持されていることを問題にする。「言わば背中合わせの関係であって、片方だけが見られるというはおかしいのである。(p. 50)」と述べているように、関係節化の制約が緩くなり目的語を主名詞とする関係節が現れてくるのにも関わらず、「雨が降っている」のような無生物を主格名詞句とする例は近世初期になっても現れないからである。先の引用からも分かるように、山下 (1996) は、目的語を主名詞とする関係節の出現を「ている・である」補助動詞化の徴証とみており、補助動詞化が進行すれば主語に有生物が要求されることはなく、結果として、「雨が降っている」のような無生物主語の例が出現するはずであると考えているようである。

しかし、ある言語形式がアスペクト的な意味を獲得していることと主格名詞句に有生制約があることとは、相関がないとは言えないまでも¹⁸、基本的には独立事象と考えてよいと思われる。なぜなら、アスペクト的な意味を担いつつ、かつ、主格名詞句の有生制約をもった言語形式の存在はありうるし、有生性の制約を持っていることが、「ている」という語連続がアスペクト形式であることを阻む理由にはならないからである。例えば、近年では鶴尾 (2002) が西欧諸語の完了形式 (*have / be, hebben / zijn* など) との共通性を指摘する「つ・ぬ」は、従来、意図的な場合に「つ」が、非意図的な場合に「ぬ」が選択されるというように、事態の意図性によってその相違が説明されることが多いが、上代からこの強い選択傾向を示す両形式について、

¹⁷ 例えば、アスペクトによる分裂能格性 (split ergativity) を示す言語において、完結相と非完結相とで関係節化の容認度が異なるならば、この議論にとって非常に参考になるだろう。

¹⁸ 進行相という意味カテゴリーを狭義に捉えるならば、有生性を前提とする意図性との相関は無視できないものとなる。

これらがアスペクト形式であることに異を挟むものはいないだろう。意図的か否かという事態のタイプの違いに応じた強い選択傾向を示す両形式は、「上接動詞に従属するだけの存在」とは考えがたいのである。

しかし、そうは言うものの、山下(1996)で近世中期の江戸語資料として扱う『唐詩選国字解』(服部南郭口述、文化11年再版本による調査)では、主語や目的語を主名詞とする関係節が全71例中の48例を占めており、「時」「所」などの抽象的な名詞句¹⁹の割合が高い上方資料に較べて際立った数値を示している。先ほど中世から近世初期については関係節化の制約と有生性の制約とは独立事象だと述べたが、この『唐詩選国字解』の調査を見ると、この江戸語での関係節主名詞の制限の弛緩が、他方の無生物主語の「ている」の例の増加と相関しないとは言いきれないようにも思われる。これに関連して、坪井(1976)では、「ている」「てある」の主語の有生性制約について、江戸語と上方語とでは大きな傾向の違いを示し、江戸語では時代を降るに従って無生物主語をとる例が増えていくのに対して、上方語の「ている」は近世を通じて有生物主語を保ち続けたことが報告されている。ここからすれば『唐詩選国字解』の結果は東西差の端的な現れということもできるのだが、もし、江戸語において関係節化制約と有生性制約の弛緩が歩を同じくしているとすれば、その相関の可能性を振り払うことはできなくなり、さらなる理論的な整備が必要になってくるだろう。大局的に見れば関係節化の制約が弛緩していくという方向性は確かであろうが、当面の問題として、近世前期江戸語における関係節主名詞の制約がどのように推移していくかは今後の研究に待たざるを得ない。

福嶋(2011)が「ている」「てある」をアスペクト形式とみなす拠りどころと目される山下(1990, 1996)は、「ている」「てある」について独創的な観点から議論されたものであり、関係節や複文の研究に対して新たな視点を提供するものであることに違いはないが、従属節での振る舞いをそのまま主節に適用する点に問題があることはこれまで述べてきたとおりである。関係節でのふるまいを「ている」成立の根拠とする以前に、不確定要素があまりに多い古典日本語の関係節や複文構造についての厳密な定式化が求められているのは確かであろう。

6. おわりに

以上、本稿では福嶋(2011)の批判への回答をかねて、「てあたり」から「ている」の変化に焦点を当てて論じてきた。「近代語」の形式ではないという根拠をもって、『今昔物語集』の「てあたり」形式を現代語に通じる「ている」とは切り離して扱うべきだと主張するならば、それは中古と中世の言語変化の断絶を意味する。確かに、「たり」「つ」「ぬ」を中心とする古代語のアスペクト体系と「ている」や新参の「てしまう」などを含む15世紀以降の体系との隔たりは大きいかもしれない。しかし、その大きな推移の中で「てあたり」から「ている」というように形式を変えながらも、「Vテイル」は動詞のアスペクト的な側面を表す言語形式として中世以前からの意味を継承してきているのである。「近代語」の境界を定めることは合理的で意味があ

¹⁹ Keenan & Comrie (1977)では「間」「程」のような動詞の項とならない抽象的な名詞句を主名詞とするものは定義上、関係節に含まれず、accessibility hierarchyでは対象とならない(Keenan & Comrie 1977: 63-64)。

ることかもしれないが、アスペクト体系の推移を記述する立場からはそれほど重要な問題ではないように思われる。日本語は1300年以上の歴史を辿ることができる貴重な言語なのであって、形態変化なども柔軟に取り込むような形で記述・分析を進めた方が益するものも多いのではないだろうか。

福嶋(2011)への回答を中心とする本稿ではあるが、議論を通して、本動詞とアスペクト形式の相関や、現在の状態を表す「た」、連体修飾節の問題など、その周辺に多くの問題が横たわっていることに気づくことができた。それらについての現段階での考え、また今後の研究への展望はできる限り記してきたつもりである。論じ残した問題は少なくないが、今後は精密な調査分析を重ねて議論を深めていきたいと思う。

参考文献

- Andrews, A. D. (2007) Relative clauses. In T. Shopen (ed.), *Language Typology and Syntactic Description*, vol. 2: *Complex Constructions*, 2nd edition, 206–236. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bybee, J., R. Perkins, & W. Pagliuca (1994) *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect and Modality in the Language of the World*. Chicago: University of Chicago Press.
- Hopper, P. J. & E. Traugott (2003) *Grammaticalization*, 2nd edition. Cambridge: Cambridge University Press.
- Keenan, E. L. & B. Comrie (1977) Noun phrase accessibility and universal grammar. *Linguistic Inquiry* 8(1): 63–99.
- 安平鏡・福嶋健伸(2005)「中世末期日本語と現代韓国語のテンス・アスペクト体系：存在型アスペクト形式の文法化の度合い」『日本語の研究』1(3): 139–154.
- 大堀壽夫(2002)『認知言語学』東京：東京大学出版会。
- 金水敏(1982)「人を主語とする存在表現：天草版平家物語を中心に」『国語と国文学』59(12): 58–73.
- 金水敏(1997)「現在の存在を表す「いた」について：国語史資料と方言から」『日本語文法 体系と方法』, 245–262. 東京：ひつじ書房。
- 金水敏(2006)『日本語存在表現の歴史』東京：ひつじ書房。
- 金田一春彦(1950)「国語動詞の一分類」『言語研究』15: 48–63. (金田一1976に再録)
- 金田一春彦[編](1976)『日本語動詞のアスペクト』東京：むぎ書房。
- 工藤真由美(2002)「文法化とアスペクト・テンス」『シリーズ言語科学5 日本語学と言語教育』, 71–92. 東京：東京大学出版会。
- 此島正年(1973)『国語助動詞の研究：体系と歴史』東京：桜楓社。
- 鈴木泰(1999)『古代日本語動詞のテンス・アスペクト：源氏物語の分析』改訂版。東京：ひつじ書房。(初版1992)
- 坪井美樹(1976)「近世のテイルとテアル」『佐伯梅友博士喜寿記念国語学論文集』, 537–60. 東

京: 表現社

- 野田高広 (2010) 「『今昔物語集』のアスペクト形式Vテイル・テアルについて」『日本語の研究』6(1): 1-14.
- 野田高広 (2011) 「現代日本語の習慣相と一時性」『東京大学言語学論集』31: 197-212.
- 野村剛史 (1994) 「上代語のリ・タリについて」『国語国文』63(1): 28-51.
- 野村剛史 (2003) 「存在の様態: シテイルについて」『国語国文』72(8): 1-20.
- 野村剛史 (2007) 「書評: 金水敏著『日本語存在表現の歴史』」『日本語の研究』3(3): 52-58.
- 福嶋健伸 (2000) 「中世末期日本語の～テイル・～テアルについて: 動作継続を表している場合を中心に」『筑波日本語研究』5: 121-134.
- 福嶋健伸 (2002) 「中世末期日本語の～タについて: 終止法で状態を表している場合を中心に」『国語国文』71(8): 33-49.
- 福嶋健伸 (2004) 「中世末期日本語の～テイル・～テアルと動詞基本形」『国語と国文学』81(2): 47-59.
- 福嶋健伸 (2011) 「～テイルの成立とその発達」青木博史[編]『日本語文法の歴史と変化』, 119-149. 東京: くろしお出版.
- 柳田征司 (1991) 『室町時代語資料による基本語詞の研究』東京: 武蔵野書院.
- 山口堯二 (2003) 『助動詞史を探る』東京: 和泉書院.
- 山下和弘 (1990) 「「テ+イル」と「テ+アル」の連体用法」『筑紫語学研究』1: 24-36.
- 山下和弘 (1996) 「中世以後のテイルとテアル」『国語国文』65(7): 39-54.
- 鷲尾龍一 (2002) 「上代日本語における助動詞選択の問題: 西欧諸語との比較から見えてくるもの」『日本語文法』2: 109-131.
- 渡辺淳也 (2009) 「フランス語およびロマンス諸語における単純未来形の総合化・文法化について」『文藝言語研究(言語篇)』55: 123-144.

The Establishment of the Japanese Aspect Marker *-te iru*

Takahiro Noda
maypole@gmail.com

Keywords: aspect, *-te iru*, grammaticalization, fusion, reanalysis, relativization, Old Japanese

Abstract

This article is primarily intended to respond to and raise some questions about Fukushima (2011), a critique of Noda's (2010) analysis of the aspectual forms *-te iru* and *-te aru* as they were used in *Konjaku Monogatari*shū. After dealing with Fukushima's objection to my use of the term *V-teiru*, I will outline how *-te iru* established itself as an aspectual form, paying special attention to some issues related to grammaticalization and relativization. I will argue that *-te wi-tari*, which was used mainly during the Heian period, can reasonably be viewed as an incipient aspectual form that gradually evolved, through semantic bleaching, into *-te iru* in modern Japanese without, however, losing its identity as a construction serving to express states of affairs obtaining at the time of utterance.

(のだ・たかひろ 国文学研究資料館非常勤職員；成蹊大学非常勤講師)